

2007年10月22日

2007年度 大学英語教育学会(JACET)関西支部 第2回講演会開催のお知らせ

関西支部支部長 木村博是
大学英語教育学会関西支部事務局
〒522-8533 彦根市八坂町2500
滋賀県立大学 小栗裕子研究室内
E-mail: yoguri@ice.usp.ac.jp

秋涼の候、会員の皆様には益々ご健勝のことと拝察いたします。

さて、今年度の第2回講演会を下記の要領で開催したく存じます。奮ってご参加いただきますようご案内いたします。

記

日時： 2007年12月16日(日曜日) 15時30分-17時00分 (受付は15時15分から)

場所： コープイン京都 2階大会議室

〒604-8113 京都市中京区柳馬場蛸薬師上ル井筒屋町 411 (TEL: 075-256-6600)

- 阪急「烏丸」駅(13番出口から)徒歩5分
- JR京都駅→地下鉄→「四条」下車、(13番出口から)徒歩5分

<http://hawk2.kyoto-bauc.or.jp/coop-inn/kyoto/access/map2.html>

講師： 植松 茂男 氏 (摂南大学)

演題： 「台湾の早期英語教育の現状と課題
—台北市文化国民小学校の例を中心に—」

司会： 木村 博是 氏 (近畿大学)

資料代： 会員：無料、非会員：500円

※事前申込不要。直接会場にお越しください。

※講演会終了後、忘年会を予定しております。

場所： コープイン京都

時間： 17時10分-19時10分

会費： 5000円

申し込み：12月7日(金)までに、幹事の
小栗までメール(yoguri@ice.usp.ac.jp)にてご連絡
ください。なお、会費は当日徴収いたします。



講演概要

本講演の内容は、科研費基盤研究(C)「早期英語教育の長期的効果について」(平成19年～平成22年)の一部として夏に実施した調査の詳細である。早期英語(外国語)教育が長期的にどのような効果を持つかについては、1960年代から70年代に流行した欧米のFLES(Foreign Languages in the Elementary School)以降さまざまな研究が行われているが、最近の調査も含めて一貫した答えは出ていない。一口に早期英語(外国語)教育といっても開始学年、教授時間、教え方、授業内容に非常に幅があり、調査結果が相違するためと考えられる。加えて中学校では、英語教育のバックグラウンドが異なる生徒同士が1クラスに統合され、小学校と非連続的なカリキュラム、教授法の下で授業が行われている場合が多く、説得力のある分析を困難にしている。今回量的研究からは少し距離を置き、1年生から週5回英語を教えている台湾の小学校を訪問した際の資料をもとに、やや質的に考察を加えてみたい。

台湾では2001年の秋に小学校5・6年で英語が必修化され、2005年からは開始学年を3年生に早めたが、その実施状況や教員確保、教員養成などに多くの問題を抱えている。今回訪問した台北市内では全ての公立小学校で1年生から英語が教えられている。その中から文化国民小学校の1年生の授業と6年生の授業を参観させてもらった。さらに許可をもらって授業の様子を一部ビデオに撮影した。授業担当者は1年生が台湾人英語教師、6年生が外国人教師であった。1年生担当の台湾人教員には事後にインタビューにも応じてもらい、いくつか示唆的な *insider's perspectives* をいただいた。同校の教務担当主任や、台湾師範大学張武昌教授などのインタビューデータとあわせると、問題の本質を考える上で役に立つのではないかと考える。日本に於ける小学校英語活動とは次元の違う社会の熱狂ぶりに後押しされているとはいえ、共通する要素も多いEFL環境下で進められている台湾の早期英語教育から学ぶことは多いのではないだろうか。時間が許せば、台北市の中高一貫校(私立)の英語教育の様子も同じく記録してきたので報告したい。

講師プロフィール

1957年生まれ。大阪大学文学部卒業、コロンビア大学大学院修士課程終了(MA)。テンプル大学大学院博士後期課程修了。千里国際学園等を経て1996年より摂南大学に勤務。現在同外国語学部教授 英語教室主任、マルチメディア教育施設委員長。JACET 関西研究企画委員(2002年～2006年、再2007年～)。日本リメディアル教育学会理事、日本児童英語教育学会運営委員。主な著書『英語学習と臨界期』(松柏社、2006)、『英語指導のスキル』(共著、日本書籍、2001)、『アメリカの蔑視語』(共著、明石書店、1996)、*22 Essays in English Studies* (Eds. Shohakusha, 2007)など。